

こどもの悩みの受け止めに関する調査研究 報告書概要版

2026年3月

株式会社NTTデータ経営研究所
ライフ・バリュー・クリエイションユニット

背景・目的

- 令和6年11月にこども家庭庁内に発足した「こどもの悩みを受け止める場に関するプロジェクトチーム」においては、こどもや現場の声を聴きつつ、こどもが利用できる官民の相談窓口の実態や、相談を受け止める側が留意すべき点等を把握・整理するとともに、こどもの悩みを受け止めるために有益な諸活動について、積極的・効果的に広報等の取組を進めることとしている。
- 「こどもまんなか社会」の実現を目指すために、こころの中にある思いや悩みを安心して誰かに伝え、打ち明けられるための安全な環境を、多様な状況にあるこどもたちの声を聴きながら整えていく必要がある。
- このため、本調査研究では、こども自身が抱えるさまざまな感情を言語や態度で表現し、伝えて良かった、相談して良かったと思える環境整備の検討に必要な事項を明らかにするとともに、こどもを対象にした官民の相談窓口の実態や、こどもたちが思いや悩みを安心しておとなと共有できる環境と、それを支えることのできる社会づくりに必要なことを把握・整理した。

こどもが悩みや不安を相談する上での課題等

- 内閣府が令和5年に実施した調査では、10歳から14歳を対象とした調査で、ものごとがうまくいかず落ち込んだときに、「**誰にも相談したり、助けてもらったりしようと思わない**」と回答した者が**4.9%**にのぼった。
- こどもの声から、こどもの受け止めについて、以下のような課題がある可能性が想定される。※
 - 利用できる相談窓口について、こどもに十分周知できていない
 - どう相談すればよいか分からないなど、相談窓口の利用にハードルを感じている
 - こどもがどう感じているか、相談を受け止める側が十分に把握していない可能性
 - 相談窓口は、SNSに加え、電話、対面も含めた多様な窓口があることが望ましい

※「こどもの悩みを受け止める場に関するプロジェクトチーム」概要資料より

こどもの悩みを受け止める場に関するプロジェクトチームの立ち上げ（令和6年11月）



チームの取組内容

- ① こどもや支援団体等との積極的な意見交換
- ② こどもに関する官民の相談窓口の実態や相談を受け止める側が留意すべき点の把握（本事業）
- ③ こどもの悩みを受け止めるために有益な諸活動について、積極的・効果的な広報等

事業の全体像

先行研究の整理と 仮説構築

- ✓ こどもの悩み相談に関する国内外の先行研究を収集・整理し、調査仮説の構築や調査デザインの検討に反映

先行研究の 収集・整理

こどもの悩みの受け止めに関する 全国調査の設計と実施

- ✓ こどもが思いや悩みを伝え、おとなが受け止めることに対するこども・おとなの認識や意識の現状を把握
- ✓ こどもが悩み等を安心しておとなと共有できる環境や、こどもにサポートティブな環境をつくるうえでのこどものニーズを把握

こどもアンケート調査

- ✓ 対象：6-9歳のこども、10歳～22歳それぞれに分けて調査（計約1万人）
- ✓ 調査方法：モニターによるWEB調査（こども本人がモニター、またはモニターである保護者のこどもへ依頼）

おとなアンケート調査

- ✓ 対象：保護者、職業等でこどもと関わるおとな、その他のおとなへの調査（計約1万人）
- ✓ 調査方法：モニターによるWEB調査

こどもヒアリング調査

- ✓ 対象：6-22歳のこども（声を聴かれにくいこどもを含む）計117名
- ✓ 調査方法：全国のこども関連の団体・施設・居住地域への訪問およびWEB会議により実施

- ✓ こどもを対象とした官民の相談窓口の実態を把握

官民の相談窓口への調査

- ✓ 行政・民間のこどもの相談窓口に対するアンケート調査
- ✓ 調査方法：WEB調査

とりまとめ

- ✓ 調査研究の結果についてこども・おとなにわかりやすく伝えるための概要版を作成
- ✓ こども向け概要版の作成にあたっては、こども会議を実施してこども意見を聴取

こども向け概要版の作成

- ✓ 主にこどもへの調査結果を基に、こどもの悩みに関する実態や、悩みを共有しやすくするための方向性等について整理

こども会議

- ✓ 調査結果や「こども向け概要版」についてこどもの意見を聴取するための会議を開催（全2回、のべ22名が参加）

おとな向け概要版の作成

- ✓ おとな・こどもへの調査結果を基に、おとなの悩みの受け止めに関する実態や、こどもが悩みを共有しやすくするために求められること等について整理

有識者 ヒアリング

学識者・現場実践者などの有識者に、調査設計やとりまとめに関する意見を聴取（全3回）

有識者・こども会議

●有識者ヒアリング

調査方法および分析の観点等について助言を受け、調査設計や調査の分析およびとりまとめの検討の参考とすることを目的として、有識者に対するヒアリングを実施した。

- ・ ヒアリング対象とした有識者は、尼崎市教育委員会こども教育支援課スクールソーシャルワーカーの黒光さおり氏、大阪大学大学院人間科学研究科講師の直原康光氏、立正大学副学長・心理学部臨床心理学科教授の永井智氏、東京学芸大学教育学部教育心理学講座教授の松尾直博氏、大阪大学人間科学研究科人間科学専攻准教授の三谷はるよ氏、サイボウズ株式会社ソーシャルデザインラボの渡辺清美氏（五十音順、敬称略）。
- ・ 各回のヒアリングでは、調査の進行段階に応じて以下の観点から意見を聴取した。
 - ・ 令和7年6月頃：調査の実施方針および事業概要、想定される成果の方向性
 - ・ 令和7年7月頃：こども向け・おとな向けアンケートやこども向けヒアリング等の具体的な調査項目の妥当性について、ヒアリング調査の実施に際しての倫理的配慮や運用上の留意点について
 - ・ 令和7年12月頃：調査結果の整理および概要版の作成方針、ならびに各調査結果の解釈や今後の分析の方向性等について

●こども会議

こども向け概要版の作成にあたり、調査結果のまとめ方や伝え方についてこどもから意見を聴取するため、こども会議を全2回実施した。

実施概要

項目	内容
参加者	全国の6歳～22歳の方（小学生以上）のこども のべ22名
実施方法	現地開催・オンライン ➤ 現地開催は、都内にあるこどものフリースペースに訪問をして実施した。 ➤ オンライン開催は、全国から参加者を募りzoom会議で実施した。

実施の様子



開催経緯

回	日時	会議の内容
第1回	令和7年12月	➤ こども向け概要版骨子の内容について ➤ こども向け概要版骨子の構成やデザインについて ➤ こども向け概要版骨子の調査結果等を読んで、こどもやおとなに対して特に伝えたいことについて
第2回	令和8年1月	➤ こども向け概要版案の構成やデザインについて ➤ こども向け概要版案の内容について

先行文献調査

実施内容	こどもの悩み相談に関する国内外の先行研究および実態調査の収集・整理を通じて、本調査研究において明らかにすべき事項に関する仮説を構築するとともに、多角的な視点を取り入れ、各種調査の設計基盤を構築した。
調査対象	Google Scholar、Dialog、J DreamⅢ、Google検索を用いた文献調査

観点	主な調査結果
国内外のこども当事者への調査とその意義や成果	国内外の大規模なこども当事者調査における調査方法や調査内容を参考として、こどもを対象としたアンケート調査やヒアリング調査の調査方法の検討、調査上の留意点とその対応策の整理、および調査で明らかにすべき事項の仮説設計を行った。
こどものこころの変化に対する周囲の気づき、理解促進のための効果的な取組、こどもの相談行動の促進要素	「こどもの悩みやもやもやを共有する・受け止めるうえでの促進要素・阻害要素」「思いや悩みをおとなに伝え相談できる場や方法に必要なこと」等の観点から、先行研究で挙げられていた要素を整理したうえで、本調査で明らかにすべき仮説を構築し、アンケート調査およびヒアリング調査の調査設計へ反映した。 - 具体的には、こどもの相談行動を規定する要素として、「心理的障壁の解消」と「肯定的体験の獲得」の重要性が明らかとなった。相談への心理的障壁（阻害要素）として、「評価への懸念」、「対象への不信」、「自立への固執」等が挙げられ、一方で相談を促進する要素としては、周囲の受容的な態度、過去に「話して良かった」と感じた成功体験等が挙げられた。また、助けを求められないこどもに対しては、おとな側からの積極的な声かけが、能動的な相談と同等の効果をもたらすことが示唆された。また、ソーシャルサポートの多さが全年代において促進要素となっていたことも確認された促進要素としてのソーシャルサポートを増やす観点では、こども本人のみにアプローチするのではなくそのこどもを取り巻く友人や家族、教師といったコミュニティ全体で支える視点が有効であることが示唆された。 - さらに、こどものSOSを早期に捉える手法として、身体症状や行動の変化の観察を通して、潜在的な心の問題の多くを把握できることを確認した研究結果も存在した。
国内外のこども当事者への調査とその意義や成果	- こどもの年齢によってこどもの相談行動や周囲のサポート等に対するニーズが変化するという先行研究の示唆を踏まえ、こども向けのアンケートやヒアリングにおいて、こどもの年齢を分析軸として加えることとした。 - 先行研究で示唆されたこどものウェルビーイングやこどもの認知・非認知能力に影響を与える要因を参考に、こどもヒアリングで意見を聴取する「声の聴かれにくいこども」について、社会的養護の下で暮らすこども経済的な困難な家庭で生活をしているこども、障害を持つこどもや医療的ケアを必要とするこども、不登校のこども等について対象に含める等の検討を行った。

こども向けアンケート調査（1/2）

実施内容	こどもの悩みやもやもやに関する経験や認識等について調査を行った。（WEBアンケート調査）
調査対象	6歳～22歳のこどものインターネットモニター 6歳～22歳のこどもを持つおとなのインターネットモニターに、お子様にご回答してもらうよう依頼（こども本人が回答） ※6歳～9歳と10歳～22歳で調査票を分けて調査した。

観点		主な調査結果
悩みやもやもやした経験について	悩みやもやもやがあったときのことについて	- 最近、悩んだりもやもやした気持ちになったりしたこどもは約60%であった。 - 主な悩みやもやもやの内容は、「進路や将来のこと」「友達のこと」「勉強や成績のこと」等であった。 - こどもは悩みやもやもやがあるとき、人に共有する、好きなことをする、我慢して過ごす等、様々な行動をとっていた。 - いままででいちばん悩んだりもやもやした気持ちになったりしたときに、友達やきょうだい、同世代の人に共有した人は約40%、おとなに共有した人は約50%であった。同世代の人に話した割合よりも、おとなに共有した割合のほうが高かった。
	過去におとなに悩みやもやもやを共有してよかった・いやな思いをした経験について	- こどものうち約60%は、おとなに悩みやもやもやを共有してよかったと感じたことがあった。 ➤ よかったと感じた理由は、9歳以下では、「はなしをちゃんときいてくれた」、「いっしょに かんがえてくれた」、「なにをしたらいいか おしえてくれた」、10歳以上では、「気持ちが楽になった」、「話をちゃんと聞いてくれた」、「いっしょに考えてくれた」などであった。 - こどものうち約20～30%は、おとなに悩みやもやもやを共有していやな思いをしたことがあった。 ➤ いやな思いをした理由は、9歳以下では、「おこられたり いやなことを いわれたりした」、「じぶんのきもちを わかってもらえなかった」、「はなしをちゃんと きてくれなかった」、10歳以上では、「一方的に話されたり、決めつけられたりした」、「怒られたりいやなことを言われたりした」、「困ったことが解決しなかった」などであった。 - おとなに悩みやもやもやを共有しなかった（共有できなかった）理由は、小学生では「話すのがむずかしくて、うまく言えそうになかった」、中学生以上では「話しても何も変わらないと思った」が最も多かった。

こども向けアンケート調査（2/2）

観点		主な調査結果
悩みやもやもやがあるとき必要なことについて	悩みを共有しやすくするうえで、おとなの関わり・受け止め方や、環境など、必要なこと	- 安心して話せるおとなの人としては、母が最も多く、次いで父、祖父母、担任の先生が挙げられた。家族や学校の先生以外の人を選んだ割合は10%未満であった。 - 安心して話せるおとなの人がいると答えた人に、そのおとなの人に話そう（共有しよう）と思う理由を聞くと、「ちゃんと話を聞いてくれる」等の悩みやもやもやを伝えたときのおとなの態度だけでなく、「自分のことをよく知ってくれている」「話しかけやすい」「自分のことをににかけてくれる」等、普段のおとなの態度や、そのおとなとの関係に関する項目も割合が高かった。 - おとなに悩みやもやもやを共有するときに、相手にしてほしい接し方として、「最後まで聞いてほしい」「否定しないでほしい」「味方になってほしい」等が挙がった。 - 悩みやもやもやがあるとき、どんな場所だったら共有してみようと思うか聞くと、「静かで落ち着いて過ごせる場所」「他の人に話を聞かれない場所」等であった。「楽しく遊んだり、人と交流できる場所」と回答した人もいた。 - 保護者や学校の先生等の身近なおとな以外に悩みやもやもやを相談するとしたら、どんなところが共有しやすいか聞くと、「対面で話せる」が最も多かった。一方で、SNSやチャットを希望することもあった。
	悩みやもやもやがあるとき、まわりのおとなの人にしてほしいこと	- 悩みやもやもやがあるとき、まわりのおとなの人にしてほしいこととして、「自分の話をきいてほしい」が最も多かった。ほかにも、「そっとしておいてほしい」「趣味や好きなことをさせてほしい」等の回答もあった。 10歳以上のこどもの回答を年代別にみると、どの年代でも「自分の話を聞いてほしい」と回答された割合が最も高かった。次いで、小学生では「そばにいてほしい」、中学生から学校を卒業した人までは「そっとしておいてほしい」と回答した割合が高かった。

おとな向けアンケート調査

実施内容	こどもの思いや悩みを受け止めることについての行動や認識等を調査し、おとながこどもの悩みを受け止めるために必要なことを把握・整理するとともに、こどもの意識との相違点を把握するため、全国のおとなへアンケート調査を実施した。（WEBアンケート調査）
調査対象	23歳以上のインターネットモニター（保護者/職業・地域活動等でこどもと接するおとな/その他のおとな 各約3,300人）

観点		主な調査結果
悩みやもやもやを受け止めた経験について	こどもの悩みに気づいたか、どう対応したか	- 直近5か月ほどでこどもが悩んでいる様子を感じたと回答したおとなは、保護者で約4割、職業等でこどもと接するおとなで約6割、その他のおとなで1割以下であった。 - こどもが悩んでいる様子に気づき、声をかけた7-8割のおとなは、こどもが自分の悩みや問題について共有してくれたと回答した。 - こどもからの相談は、こどもとの関わり方によらず「雑談をしているとき」が最も多かった。
	相談を受けた内容、受け止めにおける工夫や困りごと	- こどもの相談内容は友達のこと、勉強のこと、進路のこと等が上位に挙がり、こどもとの関わり方によって、相談を受けた内容に違いもみられた。 - おとなは、こどもの話を聞くときに、「最後まで話を聞く」、「一緒に考える」等の対応をとっていた。 - こどもの悩みの受け止めにおける困りごと・悩みとして、こどもと関わる立場によらず、「自分の対応が良かったか不安になった」が最も多く挙げた。
悩みやもやもやの受け止めに关わるおとなの認識について	普段こどもと接するときに気を付けていること	- おとなは、普段からこどもの様子や変化に気を配ったり、こどもの意思・意見や希望を尊重することを意識していた。 - 保護者や職業等でこどもと関わるおとなは「様子や変化に気を配る」こと、その他のおとなは「話しかけやすい雰囲気」を特に意識していた。
	こどもの悩みを受け止められると思うか	- 保護者・職業等でこどもと関わるおとなは、8割以上が「こどもの悩みを受け止められると思う」と回答した一方で、「その他のおとな」は、受け止められると思う割合が4割程度にとどまった。 - こどもの悩みを受け止められないと思う理由として、こどもとの関わり方によらず「自分に解決できるかわからない」が最も多かった。職業等でこどもと関わるおとなやその他のおとなは、「自分が関わっていいかわからない」が次いで多く挙げた。 「こどもの悩みを受け止められると思う」と答えたおとなは、自分自身も困ったときに、または話を聞いてもらっていると思う割合が高い傾向にあった。

こども向けヒアリング調査（1/2）

実施内容	こどもの悩みやもやもやに関する経験や認識等について、アンケート調査だけでは把握が難しいこどもの声（思いや気持ち）を聴取するため、こどもへのヒアリング調査を実施した。
調査対象	全国の6歳～22歳のこども（小学生以上）117名を対象とした（合計25箇所で開催）。 原則としてこどもへの支援等を行う団体の活動場所や居住地域に出向いて実施した。ただし、状況や希望に応じてオンラインによるヒアリングも実施した。また、声を聞かれにくい状況のこどもの意見についても聴取できるよう、社会的養護施設、学習支援団体、フリースクール、困難を抱えるこどもへの支援活動を行う団体等を実施場所に含めた。

観点		主な調査結果
悩みやもやもやした経験について	悩みやもやもやを共有した経験について	- ヒアリングに参加したこどもの8割が、おとなに悩みやもやもやを共有した経験があると回答した。 - 悩みやもやもやの内容は、友達に関する事、親や家族に関する事、学校や学習に関する事、進路や将来に関する事等が挙げられた。 - おとなに悩みやもやもやを共有した理由として、誰かに共有することで気持ちを楽にしたいという思いや、状況を改善するためにおとなの意見を聴きたいという意見等が挙げられた。 - おとなに共有した結果として、ポジティブな意見では、気持ちが整理された、安心感を得られた、考え方や行動の参考になった等が挙げられた。一方で、ネガティブな意見では、期待していた反応が得られなかったことや、話した後も状況が変わらなかった等、満足感や納得感につながりにくい場合も存在した。
	悩みやもやもやの共有に関わる要素について	- 悩みやもやもやを共有する相手として選んだ理由は、「自分がしてほしい接し方をしてくれるから」「ちゃんと話を聞いてくれると思ったから」等、おとな側の姿勢や日頃の関係性が、安心して共有できると感じられるかどうかに関係している様子がうかがえた。 - おとなに悩みやもやもやの共有を控えた背景としては、「同世代のほうが話しやすい」が多く挙げられたほか、おとなへの不信感があるという趣旨の理由も挙げられた。また、「話すのが怖い・勇気が出ない」「心配や気遣いをされたくないから」「悩んでいることを知られたくなかったから」もあり、相手の反応が気になりやすくなることや、心配されることが負担に感じる様子も確認された。 - このように、悩みやもやもやの共有には、これまでの関わりの中でどのような受け止められ方を経験してきたか、話した際にどのような対応が期待できると感じているかが、安心して共有できるおとなか否かについてのこどもの判断に関係していることが明らかになった。

こども向けヒアリング調査（2/2）

観点		主な調査結果
おとなに 悩みやもや もやを 伝えること等 について	悩みを共有しやすくするうえで、おとなの関わり・受け止め方や、環境など、必要なこと	・ 悩みやもやもやを軽くするためにおとなに知ってほしいこととして、「意見や気持ちを尊重してほしい」という意見が多く挙げられた。おとなが悩みを受け止める際に、結論を急いだり、一般論で整理したりするのではなく、必要に応じて寄り添い、考えを一方向的に押し付けられないことが、こどもにとっての共有のしやすさにつながると思うことがあった。 ・ また、「そっとしておいてほしい」「話しやすい場や雰囲気をつくってほしい」という声もあり、無理に気持ちを引き出されたり、一律のタイミングで関わられたりするのではなく、こども自身の状態やタイミングを尊重した関わりを望む声も多く確認された。 ・ また、相談相手として、両親や学校の先生に次いで、ボランティアやこどもをサポートする団体の人を挙げたこどもが約1割存在したことなど、こどもにとって、家や学校以外で安心して話せるおとながいる・安心できる場所があることが、こどもの安心につながっている事例も存在した。
	悩みやもやもやがあるとき、まわりのおとなの人にしてほしいこと	・ ヒアリング結果から、こどもたちは、悩みやもやもやを言葉で共有するかどうかにかかわらず、自分の状態に応じた関わりを求めていることが確認された。 ・ 悩みやもやもやがあるときにまわりにしてほしいこととしては、「声をかけてほしい」と感じる場合がある一方で、「そっとしておいてほしい」「趣味や好きなことをさせてほしい」といった意向もみられた。 ・ まわりから声をかけられる場合についても、すぐに理由を聞き出されるよりも、「大丈夫？」といった声かけがうれしいといった意見が挙げられた。「そっとしておいてほしい」という意見も含め、おとながそばで見守ることが安心感につながっているという趣旨の意見が多くみられた。「話しやすい場や雰囲気を作してほしい」という意見もあり、悩みやもやもやを共有しやすい環境づくりをすると共に、必要なときには寄り添い、そうでないときには距離を保つといった、関係性の中での柔軟な対応が望まれていた。

官民のこどもの相談窓口に対するアンケート調査（1/2）

実施内容	全国の官民のこどもの相談窓口における取組形態や相談内容、取組の効果的な工夫等の実態を調査した。（WEBアンケート）
調査対象	- 行政窓口向け調査：こども向け相談窓口等を設置する地方公共団体（複数の地方公共団体と共同で設置している場合や、委託等により民間事業者が運営するものを含む）回答数1,275件 - 民間団体向け調査：民間団体による、「こども自らが悩みを相談できる機能」を持つ事業を対象（こども本人からの相談を受け付けている事業や活動であれば、すべて対象）回答数298件

観点	主な調査結果
対象年代・相談方法	- 行政が設置主体となる相談窓口（以下、「行政」）は、全国の自治体から幅広く回答が寄せられた。 - 民間団体で「こどもを対象とした相談受付を行っている」と回答した団体（以下、「民間」）の多くは居場所支援、保護者支援・家族支援、学習支援等を併せて実施していた。こどもを対象とした幅広い支援活動の中で、こどもの相談への対応が行われている可能性が伺えた。 - 行政・民間ともに、相談対象年代は小学生～高校生までの対応割合が高い一方で、大学生相当の世代は対応割合が5割程度と比較的低い結果となった。 - 相談方法は、行政は電話・対面が約9割、民間は対面が8割で最多であった。実施率は対面・電話に次いでメール、SNS、オンラインビデオ通話、チャットの順となった。民間団体は、SNS・オンラインビデオ通話・チャット等の多様なチャネルの活用割合がやや高い傾向にあった。 - 相談対応日は、平日を主とした団体が多い一方、土日・夜間や祝日・年末に対応している団体も一定数存在し、民間は土曜の開設率が高い傾向にあった。また、相談方法では、チャットやSNSによる相談は土日の開設率が比較的高い傾向にあった。
相談内容の傾向	相談内容は学校生活、家庭環境、心と身体の健康に関すること、進路や将来のこと、恋愛、自分自身に関することのほか、塾・習い事、ネットトラブル、犯罪被害・加害、等多岐にわたっていた。
運営体制や相談対応の工夫	- 行政・民間ともに、職員数5人未満が4割-5割を占めた。行政は、ほとんどの窓口保健師、社会福祉士、公認心理師等の有資格者が配置されていた。一方で民間は、資格要件を一部でも定めている窓口が約7割で、要件となる資格は教員、社会福祉士、公認心理師等であった。 - 相談対応においては、行政・民間ともに、こどものありのままを受け止めることや、こどもに合わせた姿勢や態度、丁寧で温かみのある言葉づかい等、相談しやすい対応や関係づくりを心掛けていた。

官民のこどもの相談窓口に対するアンケート調査（2/2）

観点	主な調査結果
周知広報	- 相談窓口の周知については、保護者・学校教育関係者・子ども本人・地域住民等が対象となっていた。子ども本人だけでなく、身近なおとなを媒介として支援への接続を促すような取組がなされていることがうかがえた。 - 行政・民間ともに、子ども本人向けの周知・広報手段はチラシ・ポスター等の紙媒体が最多であったが、民間は自団体のSNSによる発信を行っている団体が約4割を占めた。民間団体の特徴として、相談以外の活動を通じたこどもとの直接的な接点を活用する、SNS等のこどもが接する広報媒体を活用するなど、こどもに身近な環境の中で周知を促したり、こどもとの関わりの中から相談支援へ接続したりする工夫がうかがえた。
フォローアップや多機関連携	- 多くの窓口が次の相談の約束を提案する、電話等で様子を確認する、他の支援機関や専門機関と連携すること等によりフォローアップを行い、一度の相談で対応を終わらせないような工夫に努めていた。 - 関係機関の連携先については、行政は、行政内の各支援担当部署や児童相談所等の公的機関、教育機関、医療機関、民間団体等、民間は、こどもの学校や教育委員会、行政機関・公的機関、児童福祉関連機関、医療機関、他の民間団体等、多岐にわたった。 - 他機関との連携にあたっては、行政・民間ともにこどもの意思やプライバシーの尊重、関係機関間の細やかな情報共有、つながりづくり等に関する工夫が多く挙げられた。
未充足ニーズと対応方向性	- 子どもからのニーズがあるが現在対応が難しいものとして、行政・民間ともに、こどもが相談したいタイミングで迅速に対応できる夜間・休日等を含めた運営体制や、SNS・チャット等の多様な相談チャネルについてのニーズが挙げられた。一方で、行政は人員体制や予算上の制約により常時対応や新たな相談チャネルの導入が難しいことや、民間は人材不足やボランティア体制の維持の困難が、現状の対応が難しい背景として挙げられた。 - 相談への対応における課題として、行政では、保護者経由の相談が中心となり子ども本人からの直接相談が少ないこと、匿名相談では支援につながりにくいこと、本人や保護者の同意が得られない場合に十分な支援が行えないこと等も挙げられた。民間では、こども本人との信頼関係の構築、緊急性の高い案件への対応、学校・家庭との連携の難しさ等が挙げられた。 - 上記の課題への対応方策として、行政では、外部委託によるチャット相談や24時間窓口の案内、電話・メール・手紙等の多様な相談手段の整備等が進められている。一方、民間では、オンライン・SNS相談の拡充、柔軟な相談時間の設定等のアクセスしやすい環境整備が進められている。また、フリースクール・ユースセンター・シェルター・子ども食堂・イベント等、相談以外の接点づくりや、ボランティア・プロボノの活用、保護者も含めた支援等の取組が進められていた。

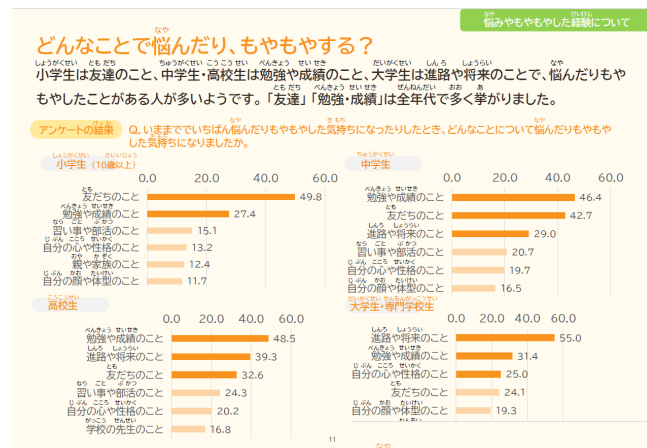
こども向け概要版・おとな向け概要版の作成

実施内容

調査研究の結果についてこども・おとなにわかりやすく伝えるための概要版を作成した。

- こども向け概要版・主にこどもへの調査結果を基に、こどもの悩みに関する実態や、悩みを共有しやすくするための方向性等について整理した。
- おとな向け概要版・おとな・こどもへの調査結果を基に、おとなの悩みの受け止めに関する実態や、こどもが悩みを共有しやすくするために求められること等について整理した。

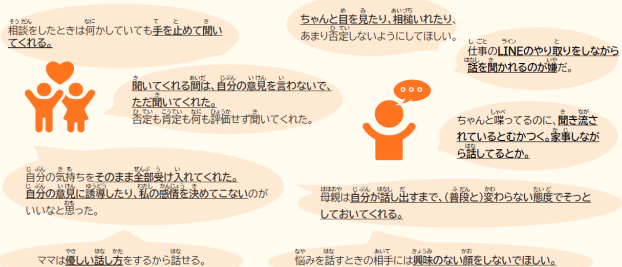
こども向け概要版の一部



悩み・もやもやをおとなに伝えた時に、おとなにどうしてほしい？

おとながこどもの話を聞くとき、手を止めて聞く、目を見る、うんうんとかいづちを打つなどの態度が、「ちゃんと聞いているよ」「味方になるよ」というメッセージになることがわかりました。

ヒアリングの意見 話しやすいおとなの人について、話しやすいと思った理由 悩みやもやもやについて、おとなに知ってほしいこと

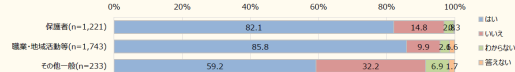


おとな向け概要版の一部

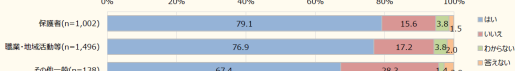
こどもが悩んでいると感じたとき、おとなは声をかけたか？

こどもが悩んでいる様子に気づいたおとなの多くは、こどもに声をかけていました。声をかけた約7～8割のおとなは、こどもが自分の悩みや問題について共有してくれたと回答しました。

おとなアンケートの結果 Q. こどもが何か悩んでいた、問題を抱えているように感じるとき、あなたから声をかけましたか。



Q. こどもに声をかけたあと、こどもは自分の悩みや抱えている問題について話してくれましたか。



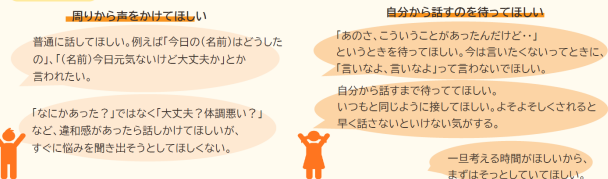
POINT おとなの声かけは、悩み等を共有する一つのきっかけとなるといえます。

こどもの調査結果

悩み・もやもやがあると、周りのおとなにどうしてほしい？

周りの人になんか話してほしいかを詳しく聞くと、「周りに声をかけてほしい」と、「自分から話すのを待ってほしい」という人がいることがわかりました。また、おとなから声をかけるときは、「元気なさうだよ」、「大丈夫？」など、軽い声かけがうれしいという意見がありました。

ヒアリングの意見 悩みやもやもやがあると、おとなに知ってほしいこと



POINT 自分から話すのを待ってほしいひとと、おとなに「無関心」でいてほしいわけじゃなくて、「気づいているよ」、「いつでもあなたの方からね」というサインを出しつつ、自分を信じて見守ってほしいと思っています。

こどもを取り巻くおとな・社会が取り組むべき事項について

調査のまとめとして、先行研究における「ソーシャルサポート」の観点も踏まえ、こどもの「日常」と「悩みやもやもやがあるとき」のそれぞれにおいて、こどもにサポータティブな環境に必要なことと、今後取り組むべき事項を整理した。

日常における こどもにサポータティブな環境に必要なこと

- ✓ こどもがおとなに「安心して話せる」「自分を理解してくれている」といった信頼を感じられるような、**おとな・こども間のコミュニケーションの確保**
- ✓ こどもが日常的に家庭・学校等以外で**安心して過ごすことができ、おとなと関わることのできる場、あるいは伝えたいことを伝え、話したいことを話せる場の整備**
- ✓ おとな側をサポートする観点から、**こどもの支援に資する官民双方の取組の強みや特徴を補い合える社会資源を整備する社会づくり**

こどもに悩みやもやもやがあるときの こどもにサポータティブな環境に必要なこと

- ✓ こどもが様々な**相談先や相談チャネルから、場面や希望に応じて適した手法を選択できる**ような社会全体の環境を整えること
- ✓ おとなが**こどもの変化に気を配り、声をかけ**、こどもが何か伝えたい様子があったり話をしたりする場面では、「**あなたの力になりたい**」と考えていることを態度や行動で示すことや、こどものしたいことを見守り、**こどもの希望を確認・尊重しながら関わる**こと

日常と、悩みやもやもやがあるときの双方の視点から取り組むことが重要

今後取り組む べき課題

こどもの変化に対するおとなの「アンテナ」の強化と情報共有しやすい社会づくり

こどもの気持ちを受け止めるための、あらゆるおとな同士による相補的な社会体制づくり

こどもに正確な社会資源の情報を確実に届け、こどもに合った利用を促進すること